

その日の喧嘩は最悪だった。

相手は二十人近くいた。

橘千隼の仲間も応戦したが、人数差はどうにもならない。

脇腹の鈍い痛み顔をしかめる。

「っ……っ！」

舌打ちする。

後輩たちが焦った声を上げた。

「千隼さん！」

「下がってろ！」

傷を庇いながら、それでも前へ出る。

こんな時、自分が引くわけにはいかなかった。

千隼は拳を握り締めた。

その刹那、目の前の不良が吹き飛んだ。

地面を転がる。

ざわり、と空気が変わった。

驚いて振り向いた千隼の目に映ったのは――。

ひとりの男だった。

ただ立っているだけだった。

それなのに、まるで巨大な岩でも現れたような圧迫感があった。

誰も近づこうとしない。

いや、近づけない。

その場にいる全員が本能で察していた。

こいつだけは、ヤバイ。

揺るがない。

動かない。

それなのに、誰もが本能的に理解してしまう。

近づいてはいけない、と。

鷹司静——この学校において、彼は有名な一匹狼だった。

誰とも群れず、常に単独で行動し、必要以上に他人と関わろうとしない。

ただ、そんな彼の頑なな世界において、唯一の例外が存在した。

それが他でもない、千隼だった。

静は何も言わなかった。

ただ、千隼の脇腹へ視線を落とし、それからゆっくりと顔を上げる。

その動作はひどく緩慢だった。

重く巨大な何かが目覚める瞬間を見ているようだった。

静の姿が掻き消えた。

そう見えた。

ゆらりと揺れたかと思えば、驚くほどの俊敏さで相手との間合いを詰めている。

振り下ろされた拳が男の身体を容易く浮かせた。

悲鳴を上げる暇すら与えず、二人目が地面へ沈む。

三人目が吹き飛ぶ。

まるで嵐だった。

だが、その中心にいる静だけは不気味なほど静かだった。

怒号もない。

威嚇もない。

ただ淡々と。

千隼を傷つけた存在だけを排除するように。

その姿は獣というより――。

長い眠りから目覚めた魔王のようだった。

静は千隼を見ているわけじゃなかった。

千隼を傷つけた相手を、無表情に見ていたのだ。

「誰ですか」

低い声だった。

「……あ？」

「誰にやられたんですか」

千隼は顔をしかめた。

「関係ねえだろ」

静は黙っている。

千隼の身体に刻まれた生々しい傷跡を見つめる。

千隼は静のことを、なんとなく避けていた。

理由は自分でもよく分からない。

気がつけば、いつも視界のどこかにいる。

近づき過ぎることもなければ、離れ過ぎることもなく。

その距離感が妙に調子を狂わせた。

何を考えているのか分からない。

ただ一つ分かるのは、千隼に何かあると、静は見境がなくなるということ。

……いつか、あいつは取り返しをつかないことをする。

そんな気がして、千隼はことさら素っ気なく接していた。

本人は、まるで気にも留めていないようだったが。

「……お前でも無理だよ」

そう言って、頑なな静の肩を押し戻した。帰れと言いたかった。

これ以上、この真っ直ぐな後輩を厄介事に巻き込みたくはなかった。

だが、静は足元に根を張ったように動かない。

「名前」

「しつけえな」

「名前」

感情の消えた声で繰り返す静は、まるで壊れた機械のようだった。

千隼は小さくため息を吐く。このままでは埒が明かないと諦め、渋々と口を開いた。

「北鷗の冴島だよ」

静は小さく頷いた。そして。

「分かりました」

それだけを言い残し、背を向けて去っていった。

後ろ姿を見送りながら、千隼の胸に嫌な予感が過る。

ものすごく、嫌な予感だった。

その夜、敵チームが壊滅したという噂が街を駆け巡った。

翌日の夕暮れ——。

鉄パイプをまともにくらった千隼だったが、咄嗟に受け身を取れたのが幸いだっただ。病院での検査の結果、肋骨に異常はなく、痛みさえ我慢すれば動くことはできる。

「あいつ……大丈夫だろうな」

最後に見送った、あの大きな背中が脳裏をよぎる。

音もなく雨が降っていた。

暗い路地裏を歩いていると、背後から声を掛けられた。

「先輩」

弾かれたように振り返る。

そこには静が立っていた。

身体中が血だらけだった。

制服は酷く破れ、隙間から覗く腕や腹には、生々しい裂傷と紫色の痣が痛々しく残っている。立っているのが不思議なほど傷だらけだった。

「お前……！」

思わず駆け寄る。

「何やってんだ！」

静は少しだけ首を傾げた。

「獲ってきました」

「とってきたって……、マジでやったのか？」

「はい。約束ですから」

静は平然と答える。

その手には、確かに相手のグループのボスがいつも着けていた派手なネックレスが握られている。血が付いている。

「馬鹿か！」

「……」

「これ……っ！ 入院レベルだろ、その怪我！」

静の腹と腕には深く切り裂かれた傷がいくつもあった。

普通の人間なら動けないはずの量の出血だというのに、この男は千隼の前で微動だにせず立っている。

「約束……守りました」

静は少しだけ微笑んだ。それは怖いくらいに純粹な笑みだった。

千隼は頭を抱えた。

この大型ワノコは本気だ。自分で言った言葉を、文字通り命がけで実現する馬鹿野郎。

「……分かった。分かったから、まずは病院へ行け」

「病院はいいです。構いません」

「はあ!？」

「それより、先輩の怪我が心配です」

静の大きな手が、千隼の腕を掴んだ。熱い。

力は強いが、震えるほどに制御されているのが分かる。

「先輩が傷ついていたので」

静はその音を、ただ黙って聞いていた。

部屋のドアを閉め、背中で錠が下りる音が響いたと同時に、千隼は腹を括ってさっさと衣服を脱ぎ捨てた。

たいしたことじゃない。男同士の、ちよつとした手慰みだと思えばいい。

そう自分に言い聞かせていた。

「せ、先輩……」

だが、その後が続いた静の声は、明らかに動揺を孕んでいた。

いつも氷のように無表情なこいつにしては、驚くほど剥き出しの反応だった。

しかし、その瞳だけは千隼の身体に狂おしいほど釘付けになっている。

固唾を呑んだ喉仏が、ごくりと大きく上下するのが見えた。

「なんだよ。……やるんだろ？」

少しだけ優位に立った気がして、揶揄うように笑った。

だが、それが引き金だった。

その瞬間、静の瞳の奥で、昏い焰が爆発するように色を変える。

飼い慣らされた大型犬が、本気で獲物の喉元を噛み切りにいく直前の、危険で恐ろしく焼け付くような視線。

「……先輩」

低く掠れた声が鼓膜を震わせた。

次の瞬間には、視界が激しく反転し、千隼は容赦なく壁へと押し付けられていた。

静の巨体が覆い被さる。欲を孕んだ雄の匂いが一気に千隼を包み込んだ。

「お前、目が座って……んっ！」

問答無用で唇を塞がれる。

覆い尽くすように、口内を蹂躪される。

千隼の反論をすべて飲み干すような獰猛なキスに、思考が一瞬途切れる。

「……っ！」

背中が壁にぶつかり、鈍い衝撃が走った。

驚きに目を見開く暇すら与えられないまま、乱れた呼気と共に唇が押し潰され、強引に隙間をこじ開けて狂おしいほどの舌が割って入ってくる。

「ん、う……っ!？」

後ろへ逃げようにも、頭の後ろは硬い壁。

左右は静の太い腕で完全に塞がれ、檻の中に閉じ込められたかのように逃げ場がどこにもない。

逃がす気など毛頭ないというように、静の大きな手のひらが千隼の頬を包み込み、壁へと押しつけるように固定すると、すべてを力づくで飲み干すように、獯猛に、深く熱く、口吻で塞ぐ。

鼻の奥を抜けていく静の余裕のない浅い呼吸と、口内を容赦なくかき回され、思考が欲に攫われた。

大きな身体に追い詰められ、身動きが取れない。

腰の力が抜けそうになるのを、静の頑強な体躯が容赦なく押し潰して支えていた。

抵抗しようと張っていた身体の力が、強引に酸素を奪われることで、じわじわと甘くほどけていく。

「……は、あ……っ」

わずかに隙間ができた拍子に、千隼の口元から情けない甘い吐息が漏れ、壁に白く溶ける。

その無防備な響きが、静の渴きを狂わせ、余裕を剥ぎ取るように、さらに深く千隼のすべてを貪り尽くすように、再び舌を絡めてきた。

たっぷりと千隼の口内を味わったあと、首筋へ唇を滑らせ、胸に顔を埋め、執拗に左の微かに反応し始めた突起を舌で転がす。

唇で挟み、吸い上げながら、それと同時に、もう片方を、大きな右手の指先が優しく、けれど確実に芯から捏ねるように転がす。

「煽ったセンパイが……悪い」

「おい……まっ……て、は……あっ、そこ……っ」

左右から同時に押し寄せる容赦ない淫律の波に、千隼の声は瞬く間に形を失い、甘く掠れて漏れ出した。

静は目を細め、その熱を吸い尽くすように交互に、時には甘く喰み、指先で執拗に理性を削り取っていく。

「あ……………うそ……………」

容赦なく先端を玩弄されるうちに、制御の効かない領域は、静の欲にゆっくりと侵食されていった。

可哀想なほどに胸を玩弄され、弄り倒される頃には、下腹部で育った昂りは、身体の奥深くへ静かに広がり、秘められた境界線を甘く揺らしていった。

「あ……………っ、ま、だ……………ッ」

懇願とも拒絶ともつかない声を溢す千隼を、静は逃がすつもりなど微塵もなかった。

すでに力が入らない蕩けた身体を、静の大きな両手が無慈悲に、けれど壊れ物を扱うように慎重に抱え上げる。

そのまま、奥の千隼の部屋まで軽々と担ぎ込まれ、なだれ込むようにベッドへと押し倒された。

ここからの静は、まるで飢えた獣そのものだった。

いつもなら千隼の顔色を窺うような、いつもの従順な後輩の影などどこにもない。

剥き出しになった静の「男」の質量に、千隼の背筋にゾクゾクとした戦慄が走る。

頑強で大きな身体で完全にシーツの上へと押し潰され、身動き一つ取れない。

自由を奪われたまま、千隼の肌のあらゆる隙間を熱い舌と唇で容赦なく蹂躪していく。

耳元で、荒ぶる吐息と一緒に吹き込んでくる。

「センパイ……、エッチすぎるでしょう……ヤバいっすよ」

掠れた声で囁かれた、男の欲を孕んだ独白に、心臓が跳ね上がる。

視線が絡み合った瞬間、静の瞳の奥で獰猛な獣が牙を剥いた。逃げ場を完全に潰し、すべてを喰らい尽くそうとする雄の本能が、その凶暴な輪郭を剥き出しにしている。

千隼は初めて見る静の狂変に、恐怖すら感じた。

※本作品はフィクションです。

実在の人物・団体とは関係ありません。

未成年の閲覧・購入は禁止します